明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

「統一」

第廿三年　第二百八十八號　一月號

所謂世界思潮と我黨の覺悟　一記者
健全思想と日蓮主義（續）　大僧正　本多日生
日蓮聖人教義綱要（續）　僧正　井村日咸
機微譚語（七六七七七八）　兼寛の駄々醫者の本領　江戸最負　山根青村
高橋、岡田兩理學者の立春觀評　松尾皷城
課題和歌『曉山』發表　子爵　清岡長言選
統一俳句
所謂人心統一案理由書を讀む　一記者
二行雜報

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

（第二十三年一月卷）　「統一」　（第二百八十七號）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

賜天覽

大藏經要義

十二月　第十一卷

大集經（六十卷）（一）此經の通覽（二）要文の講述（三）重譯經の對照（四）大集部の諸經（五）大集部諸經の闕本

發行目次

思益梵天所問經（四卷）（一）此經の通覽（二）要文の講述
勝思惟梵天所問經（六卷）

○本書は隔月發行十八卷（三ヶ年）完結、一ヶ年前金拾貳圓半年同六圓五拾錢、送料不要、卷十一迄四百四十七經千五百六十一卷、卷六迄三版、既刊目次は昨年七月以後の本誌廣告に掲ぐ。

日蓮主義綱要

四六版洋裝並製
正價壹圓拾錢送料共

新刊 日蓮主義の運用

二書共總振假名附
四六版美本
正價送料共
日蓮主義綱要に同じ

新刊 日蓮聖人の感激

東京府品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會

碧瑠璃園著（最新刊）

日蓮聖人

◎四六版九〇〇頁ポイント型新活字◎印刷鮮明
總クロース上製一冊價貳圓八拾錢郵稅拾貳錢

序文
大僧正　本多日生
海軍中將　日蓮主義　佐藤鐵太郎
正幹　能仁
僧侶　多事
下猶下閣下猶下　生日郎一

口繪
◎聖人御影及眞蹟（コロタイプ版）◎
開教聖跡（原色版）

南無妙法會式櫻の咲きにけり……實にや萬燈翳して團扇太皷の高鳴る熱狂、其潑剌たる法華の大精神は千古不滅聖者六十年の生涯を物語る史傳の各頁は眞乎吐血叫雲の記錄となすべし。流謫の孤島にありても聖者は恰然として宣ひぬ。『日本國に於て第一に富める者はわれ日蓮なるべし』と。此歡喜、此歡喜に溢れたる生活は近代人の胸奥の切に欲求する所、傳記小說の大家此に畢生の努力を效して祖師様の一生を描く、情理双絕！

東京京橋區桶町　株式會社
大阪南區三休橋
振替東京三三六一八　大阪二七一五五
大藏閣發行

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行人松尾英四郎〈印刷人鈴木日雄〉（本誌定價一冊十錢郵稅五厘）▼

日蓮上人御聖像　木多大僧正猊下題字（小和田鐘太郎氏藏）　王山筆

松鶴旭日（美作影山廉二氏藏）　王山筆

所謂世界思潮と我黨の覺悟

近く歐米より傳ふる諸新聞紙上に顯れたる電報を見れば、彼の過激派と稱する世界の破壞主義の一派は、曩に露西亞を破滅に歸せしめ、今將に獨逸を混迷に陷らしめんと試みつゝ、進んで英米を覆さんと計劃し、一方東洋の天地をも混亂せしめんと努力しつゝありと傳ふ。而して彼等は自己の理想を以て世界最後の社會的建設事業なりとし、今や世界戰後人心動搖の機に乘じて一種の宗教宣布運動以上に考へ或は顯に或は隱に、到れり盡して巧妙に其目的を達せんとしつゝあるなり、其運動金は意外の多額を用意し居れる由にて、其電報の上に現れたる二三を檢するも、曰く東洋に向つて盛んに黃白を散ぜんとしつゝあり、曰く運動員は既に印度支那朝鮮に派遣せられたり彼等は旺んに運動費を振り撒くべし等云々、而して此運動金は如何なる部面に散ずるやと云ふに、第一は新聞記者、第二に學者又は學校教員（上は最高學教師より下は小學校教員に至る）第三に代議士、第四に辯護士、第五に宗教家等の中にて、やゝ此主義に近き者に向つて黃白を與へ、或は新聞雜誌に或は講演に硬軟筆舌を盡して漸次人心を傾け、遂に極端なる其主義者たらしむるにありと云ふ、正々堂々の外敵よりも隱密に裏より來る毒蟲の迫害は最も要愼せざる可らず、獅子身中の蟲は戰事の敵探にあらずして平時の金探なりとす、今や世界の思潮は正邪入り亂れて人心大惑亂の狀態に蹈みつゝあり此際中心健全の思想を以て任じ、世界の思潮指導を以て任ずる我日蓮主義者は勇猛一番我國中堅の本軍となりて、三千年來金甌無缺の國家を擁護し、進んで此の團體の最善意義を世界に耀示するの覺悟なかるべからず。

健全思想と日蓮主義（續）

本多日生（未校閲文責在筆記者）

▲改造の要求

次に一般の流行語として改造々々と云ふ事を云ふ、社會の現在の狀態から改造すべきものが澤山あるといふのである。第一は金錢萬能主義の改造、それは今日は世人が大方金を目的として居る、一も金二も金と云ふ、假りに活動寫眞を見ても皆金の問題である、其例を云へば此處に一人の女がある自分の戀ひ慕ふ男があつて相思の中となり夫婦の約束までもした處が一方金滿家より嫁に貰ひ度とて自動車で迎ひに來た、女は迷はざるを得ない、そして今迄戀慕して居つた男は人格も高く氣立もよい然し金がない、夫婦約束までもしたが金の有る方に心變りして自動車に乘つて後向きもせず去つて行くのである、後に殘されし金のなき方の男は只憤慨して居るばかりて如何とも致し方がない、遂には世の中は眞に金ジャナーと感じ入ると云ふ幕である。世界は實にこんなものである、斯の如く餘り現代は物質的である之等改造の必要がある、次には近年我邦の教育が普及した爲めに我が日蓮主義は日に〳〵勃興する、昔は教育の普及を缺いて居た爲に法華經も知らず日蓮主義を聞かしても本當の事は解しなかつた今日各地に日蓮主義の興るは全く教育の效である此點私は大いに教育の普及を贊歎する、然し教育者間には此處彼處に改造を唱へて居る、或は教科書の改訂或は教育方法或は教育者の人格如何等と教育調査會なるものを設けて種々改造を論じて居る、宗教家の方にも同樣改造すべき點は一二てない、

▲根本的改善及び資本勞働問題

然し更に眼を刮大にして見るときは根本に今一つ大きなものが横はつては有りはせぬか、之は改造とは少し意味が違ふ改造も善い事は善いが現在人の云ふ改造は畢竟するに部分的である。其の根本物に就ては世人は餘りに理解せずに居るが中には少しは感じて居る者は朝の四時頃の氣分に過ぎぬ、夜が明けそうて未だ暗いやうなものである之を明白にせねばならん、或は之れを根本着想とも云ふべきであらう。即ち物事の根本根底から考ふる事である、換言せば「考へ直す」事である、政治家も教育家も宗教家も目前に拘泥せず古往に溯り根底より考へねばならん、汗を流して眞から考へ直す事である、政治家は政治の事のみでなく教育の事も宗教の事も共に責任を以て考へ直さねばならん政治家が惡くても宗教家が惡くても教育家が惡くても皆共同の責任である、それ〳〵各部面の缺點を指摘して惡口云へば如何樣にも云へるものだ、惡の責任は一つである、故に根本に歸りてこれならばと云ふ處に考へを戻す、之が大事な事である。一二を云ふて見れば、經濟から云へば資本家と勞働者の調和である資本家が勞働者を壓迫し苦るしめる、又勞働者は資本家を脅かし自動車が通ると石を打ち付けると云ふ樣では社會は惡い影響を受けて居るのである、戰後の國家は戰爭の勝敗よりも經濟に依つて一層烈しき變動が起る經濟の調和を持ち得ならば最後の勝利をゝる事が出來る、戰には勝つても資本家と勞働者との衝突が止まなかつたらば、工業經濟の上から國家は亡びてしまう、故に此調和は最も大事な事で資本家は同情心を持つて彼も人の子なり、彼も日本人なり我同胞なりとして身體の健康も計り精神の發達も計つてやらねばならん、又勞働者よりも資本家無くては仕事の原料も求むる事が出來ず仕事も出來ないと云ふ樣に考へて、互に理解し合ふ處に調和が出來る。然し之はなか〳〵六ケ敷事で西洋各國でも資本家と勞働者と喧嘩をせよと敎ふる人はないが平和を持つ事が難いのである、何とかして調和しようと或會社は資本家に利益を分配すると共に勞働者にも配當を與へて居るのもある、それでも平和は六ケ敷い日本にも、理論は一定して居るが事實が難いのである、病人を直したいと云ふは何人も同じ希望である、然し死てしまう、活したいと親類の人も家内の人も醫者も云ふけれども死だ病人は致方のない樣なものである、生と死とは別物である、此病人を直したいは問題でない如何にして直すかゝ問題なのである資本家も勞働家も政治家も敎育家も宗敎家も考へては居るが事實は難い、結局失敗を見るのが八九分かも知らん。故に改造と云ふよりも根本の思想即ち頭を出來さねばならん、利益一點の金では致方がない、勞働家も金、資本家も金、二割の利益あれば三割に致さうとし五割の利あれば八割にしようとする、今でも六十割の利益配當の會社が有ると云ふがそれでも六十五割の配當をも望んで居る。勞働者は勞働者として賃金を增さうとする一圓をば一圓二十錢になれば一圓五十錢一圓五十錢でも滿足は出來ず二圓三圓にとそれから先きと進んで行く、不安の狀態は少しも直らん、之を部分的に直さうとしても駄目である、根本より考へ直さねばならん、考へ直すは何處より起るかが問題である、死ぬべき病人に手をかける樣の事をして居つては駄目だ、手ぬるくては助ける事は出來ぬ之れにはどうしても宗敎的清き精神に基かねばならん。人には永久の生命がある清き精神に立ち歸り大理想の下に國民全體が懺悔をせしめなければ駄目だ、鹹に恐れ入りましたとまでピッショリ汗を流して懺悔せんければならん。朝顏を洗ふて新聞でも讀んで居つた者が朝顏を洗つて直ちに佛樣の前で南無妙法蓮華經と唱ふる樣にならねばならん。法律の如きは如何に研究しても駄目だ、根本道德に入つてからでなくてはならん。其處に健全の思想があると私は思ふ。私のみならず他にも近頃これをいふものが出て居る。此處に日蓮主義は如何なる關係あるかといふに實に善く說き盡してある。

▲日蓮主義の本立と近代の遣り口

我日蓮主義は國家の大事、政治の方針人道主義、經濟の根本義等總てに力ある

説明を與へて居る、或は立正安國と云ひ正法治國と云ひ、資生産業は皆正法に順ぜんと云ひ、又女房と酒うち飲んで何の不足かある、又宮仕へを法蓮經と思召せ等とあるのは、即ち日蓮主義は全く生活と共に存ずる事を示して居るのである、斯の如きは有らゆる生活に關係して居る何人が見ても明瞭に首肯すべきである、人間生活の凡てに力を與ふる眞底は即ち法華經と云ふ釋迦牟尼世尊の最高の教に依らねばならぬ。天晴れぬれば地明かなりと根本を明すべきを説てある。即ち天晴が大事である、根本に暗くして他に通する筈はない、今更新思想と云ふても之れ以上の新思想はありはしない、天晴即ちアッパレと云ふ三世諸佛一貫の大道を以て日蓮上人は立たれて居る、近來の學説や行ふことは其時其時の間に合はせである、假令は家を貸すにも東京邊では二十も三十も個條を作つて約束をして居る、然し愈々の場合は如何に多くの條件があつても無駄である、家賃を拂はぬ、金がない訴へるなら訴へろと云ふ事になれば三十ケ條あつても五十ケ條あつても何にもならん條件を書くよりも精神的に約束するが可い、地方に於ては特に法律を大事がつて居る者がある、民法百何條に何とあるとかて得意がつて居つても佛壇があつても題目を唱へるは縁起惡るいなと云ふ樣では何にもならん、法律を楯にして喧嘩をやる必要はない人格上德義を以てすれば村治は出來得る、我は公平の樣なれども頭の中は三角か四角て少しも公平てない、其損害は村全體て受けねばならんやうては驚て國家に其影響が及ぼすのてある。今は全く覺めねばならん時てある。

▲修羅界の世界

歐洲の戰爭も元は利益の爭ひてある、英吉利乃至佛蘭西の國民と獨逸の國民との生活爭ひから來て居る、其衝突が彼樣の大戰爭と成つたと見てよい、今人道主義とか軍國主義とか云ふて居る、軍國主義は不可ない、人道主義を主らんと云ふて居るが、張して居る者が他日軍國主義者となるかも知らん、戰爭は止み平和になつても利害問題は徹底止まぬ、戰爭に困つた人は戰爭をやつてはならん戰爭はいやだと云ふても政治家や金滿家は少しも困りはせん、却つて戰爭の爲に名譽を得又は利益を得て戰爭を結好なりと思ふて居るものもある、戰爭に困つた人は死んてしまい戰爭好きな人が又始める、戰は永久に絶ゆるものてはない、然し戰爭は文明てはない修羅界てある、今や世界は全く修羅場てある、外國計りてはない我日本國も然りてある、支那大國が中心を失ふてフラ付いて居るので各國ては何れも目を付けて居る、そして何れも外國から文句を云はせないて獨りてツクリと甘い事をしやうと思ふて居る、今は世界を通じて盜賊の團結と云つてもよい、世の識見家は大に考を吐いて社會の爲に盡さねばならんと思ふ、又今度の内閣は之等の點に就て大いに努力せねばならんと思ふ。

（未完、次回にて完結）

日蓮聖人教義綱要（第十八回）

井村日咸

第五章　本門の本尊

第三節　本尊の意識（承前）

次には受戒作法の意味合から本尊の實體を見て行くのであります、是は本門の戒壇に於て、受戒の時の作法を言ふのであつて、受戒の時の儀式から起つて來る問題なのであります、受戒の事も小乘の始から權大乘實大乘共に、夫々の掟が定だめられてある其意義は夫々の教義の立て方に依つて異なつては居るが、受戒を全然無視した教は一つも無い、佛教信仰の表旌として必ず受戒の作法を爲すべき事に定められたのである、今本門の教義に於て立つる處の受戒の作法は、小乘教抔に言ふ樣な形式にのみ拘泥して居るものではない、本門の教義は形式に重きを置く必要が存せないからである、小乘教では受戒の時には戒師阿闍梨師等受戒に關係ある人々を招き集めて來ねばならぬ、千里の内に夫等の人々が居ない場合は止むなく自誓受戒を許すが、千里の内に其等の人々が居る以上は是非とも招集めることが必要である、そうなると受戒の儀式が大袈裟になり、中々準備も要する譯である、此は小乘教の教理として、佛樣も羅漢樣も、其極果に達すると灰身滅智して無餘涅槃に入つて仕舞はれる、その場合には佛も羅漢も世に存在しない、存在しないものを戒師と仰ぐ譯には行かないから、現實の人を招集るの餘儀なきに至るのである、畢竟常住實在の佛陀を說かぬから、こういふ事に成るのである、處が本門の教義に於いては、十界の事常住を說き、常住實在の本佛在すことを明すが故に、其實在の本佛等を以つて受戒の能化と仰ぐことが出來る故に、敢て現實の人々を招集する必要が無い、何處でも自己の信仰の發露したる處を卽是道場として受戒の壇場とし、其處に實在の三寶諸尊を勸請して、「今身より佛身に至るまで、能く持ち奉る南無妙法蓮華經」と自誓受戒するのである、斯樣な次第であるから、儀式としては精神的に取扱ふから、形式は餘り重きを置かない事になるのである、然し將來事の戒壇道場建立の場合に於て、一國同歸の受戒作法を行ふ時は、一定の形式を定められねばならぬであらうが、今は個人々々の信仰の場合を申したのである、何に致しても、實在の佛菩薩を受戒の能化と立つることは如何なる場合でも變はないのである權大乘の諸宗に至つて、實在の意義が判明せぬ爲め曖昧なる態度に出て居るものがあるが、多くは小乘の形式に則つて居る傾がある、現今の禪宗や淨土宗でも受戒を行るが、和上卽ち戒師は生臭坊さんが行る樣である、それは實在の本佛を知らざるが爲である。

本門に於ての受戒作法に就ては法華經の結經たる觀普賢經に示されてある、此經は末代に法華經を信ずるもの丶信仰の狀態を詳細にお說きに相成つた御經であつて、始に我々の信仰の前提として六根の罪障を懺悔すべきことを敎へ、其懺悔の心緻々切にして、實在の本佛に接見し得ることを敎へられた、自我偈の中の一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山の意味を具體的に御說に相成つたものと言ふてよい、其御經の中に受戒作法の形式として示された御文がある、こゝで一寸御注意致さねばならぬのは、法華經の藥王本第二十三以下の諸本は、釋尊は寶塔を出で給ふて、多寶の塔は其戸を閉ぢ、上行等の本化の菩薩は各本處に還歸し給ふた後であるから、其本已後の說相を天台大師は還迹流通と申されて、迹門に還つてお說に成つた樣な場合がある、そこで此後にお說に成つた處は本門の意味で、開顯して見ねばならぬ事柄があるのであります、今の受戒作法の文も其點がありますから御心得までに申上げて置きます。

觀普賢經に曰く（縮刷法經五一一）

今釋迦牟尼佛我和上と爲り給へ、文殊師利阿闍梨と爲り給へ、當來の彌勒願くは我に法を授け給へ、十方の諸佛願くは我を證知し給へ、大德の諸菩薩願くは我伴と爲り給へ、我今大乘甚深の妙義に依つて、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し奉る。

此文の始めの、和上と阿闍梨と、教授とは此を三師と云ふて受戒作法の能化の主たるものである、和上ては一證と一伴は從たるべきものである、教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教へらるゝ先生樣である、此お方のお導に依つて我等は信仰に入り得ることが出來る、若も此お方がお出にならねば何等は遂に信仰の何物たることも解せず永に信仰に入るの機會を得ないのであるから、此お方は大切なお方である、此經には當來の彌勒菩薩を阿闍梨師と仰いであるが、本門の教授師とは我等に信仰の何たるものであるかを教

意に依つて、本化上行菩薩等を教授師と仰き奉る、本化の菩薩は大菩薩は本佛釋尊の御使として末法の我等衆生を信仰に導かんとして御骨折下されて居ることは義に詳しく申上げた通りの事であるが、今我等は本化の菩薩を末法の大導師として我等の教授師と仰き奉るのである、而し て戒師和上の授け給ふ戒體は何であるかと申せば即ち南無妙法蓮華經の法寶であります、三世十方の諸佛を證明人とし、菩薩以下の人々を我等の同伴衆として見ることは此經と異りは無い日蓮聖人が圖顯遊ばされた本門の本尊は此等の凡てを具足してお書顯しに相成たもので、聖人圖顯の曼荼羅を展開し奉るならば、受戒の儀式が整備して顯はれて居るのである。

戒體　南無妙法蓮華經を中央に

戒師　釋迦牟尼佛　多寶如來　一を其左右に

阿闍梨師　教授師　上行等　本化の菩薩は脇士として又其左右に列座せられた此戒體と三師とを本尊中の最も主要なるものとして如何なる場合でも整足して示された。

一證として十方三世の諸佛

一伴として菩薩以下の諸聖衆

は時に存略一定して居らぬ、主要ならざるが故である。

本門の本尊は已上の二義即ち、歸依三寶と受戒作法の兩面から其意味合を見るのでありますが、此二義は別々のものではなく結局は一義であります、觀普賢經の文にあるが如く、三師一證一伴を立てゝ如何なる信仰を爲すかと言へば我今大乘甚深の妙義に依つて佛に歸依し法に歸依し僧に歸依し奉ると云ふのであるから我等の信仰は歸依三寶であると云ふことが示されてある、故に本門の本尊は、信仰の作法として、將た又信仰の實體としてお示し下されたものであると信ぜねばならぬのであります。

第四節　三寶の調和

本門の本尊の實體と意義に就てはお了解の事と思ひますが、其實體たる本佛釋迦牟尼佛と本法妙法蓮華經と本化上行菩薩と此三寶の關係に就て更に申上げて置かうと思ふ、既に前來申上げた處に此三者の關係は充分申上げてあるのであるけれども、現在の日蓮主義者の中には此關係を誤解して妙法蓮華經の法寶を大切にするの餘りお釈迦樣が邪魔になつたり、本化上行菩薩、其再身日蓮聖人を尊崇するが爲めに、お釈迦樣に隱居申付たりする樣なものも出來て來て、或一方に偏倚するが爲めに三寶樣を適當に調和して信仰することが出來ないと云ふ樣なものが出來て居るから、冗い樣であるが重て申上げ樣と思ふ。

本尊の事に就て日蓮聖人の御教訓は澤山あるが、其中で觀心本尊抄が最も完全に本尊の意義を御說明に爲つて居ることは何れにも爭の無い事である、其本尊抄の最後の結文に、此三寶の調和を示して

一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の內に此珠を裹みて、末代幼稚の頸に懸さしめ給ふ、四大菩薩の此人を守護し給はんと太公周公の成王を攝扶し四皓か惠帝に侍奉せしに異ならざるもの也（遺九四九）

と仰せられた、妙法蓮華經は本佛釋迦佛の大慈大悲を其基點として顯はれて來た功德聚の袋である、其功德聚の袋を末代幼稚の我等が頸に懸さしめ給はんとして御心勞下さるゝのが本佛の御心である、又其本佛の御心を酌んで、末代の我等をして本佛の御心に副ふべく御導き下され御守護下さるゝが、本化の四大菩薩である、此四大菩薩が末法幼稚の我等を守護し給はんこと太公周公の成王を扶けたるが如に御守り下さるゝと云ふことは、此も矢張り佛の御使命に依るのである、此意味が了解出來たならば、三寶の關係は決して問題と爲る譯のものでは無い此三寶の關係を誤るのは、但一部分の御說明のみに囚はれて仕舞ふから、全體が分らぬことに成るのであらうと思ふ、三寶の調和に關する御教訓は至る處にお示しに成つて居るのでありますが今二三の文を引證致しませう。

御書量品に良醫と良藥との關係に就いて、良醫は明練方藥善治衆病の力用を具へて居る、其良醫は諸の經方に依て好き藥草の色香見味皆悉く具足せるを求め擣き篩ひ和合して、大良藥を作つた、此良藥を吸ましむる爲めに使を遣はして還つて告げしめたと云ふことが說いてある、此に良醫とは本佛釋尊大良藥とは、南無妙法蓮華經、使とは本化の菩薩である、此を本尊抄に

今の遣使還告は地涌也、是好良藥とは壽量品の南無妙法蓮華經是也（遺九四四）

此良藥は佛猶迹化に授與し給はず（遺九四四）

と仰せられた、良醫と良藥と使人との關係に於て三寶の調和は充分に示されて居る、大良藥たる妙法は、本佛たる良醫の手に依りて、使たる本化に授與せられて居るものであることは明白である、君主の使命を帶びて外國に駐在する大公使の如く、如何なる場合でも、本國の君主の命に服從すべきは當然である、若も國外駐紮の使臣が本國君主の命に背く樣の時には直に其職を免ぜられて本國に召還せらるゝであらう、本佛の使命を帶ひた、本化の諸菩薩が、若も本佛世尊に對抗する樣な振舞があつたならば、直に其使命は免ぜらるゝである、今の日蓮主義者の中には、本化の菩薩を以て本佛に對抗せしめんと主張するものがあるが大に考へねばならぬことであろう、聖愚同答抄に

嬰兒に乳をふくむるに、其味をしらずといへども自然に其身を生長す、醫師が病者に藥を與ふるに病者藥の根源を知らずといへども、服すれば自然と病愈ゆ、若藥の源を知らずと云ふて醫師の與ふる藥を服せずば其病愈ゆべしや、藥を知るも知らざるも、服すれば病の愈ゆの事以て是同じ、既に佛を良醫と號し、法を良藥に譬へ、衆生を病人に譬ふ、されば如來一代の教法も擣篩和合して妙法一粒の良藥に丸せり、豈知るも知らざるも服せんもの煩惱の病愈へざるべしや。（遺五八〇）

此文は正しく壽量品の譬說の意味合に依つてお書に成つたのである、持法華問答抄には

譬へは高き崖の下に人ありて登ること能はざらんに、又崖の上に人ありて繩を下して、此繩に取つかば、我崖の上に引登さんと云はんに、引く人の力を疑ひ、繩の脆からんことをあやぶみて、手を納めて取らざらんが如し、爭か崖の上に登る事を得べき、若其詞に隨ひて手をのべ足をとらば即ち登ることを得べし、唯我一人能爲救護の御力を疑ひ、以信得入の法華經の教の繩をあやぶみて、缺定無有疑の妙法を唱へ奉らさらんは力及ばず、菩薩の崖に登る事難かるべし。（遺四七〇）

崖の下の人とは我等衆生である、崖の上の人とは佛陀である、佛陀我等を見そなはして、大慈悲の御思召より、妙法蓮華經の教の繩を下して、此繩に取付けよ、引上げてやろうと仰せらるゝ、我等は其仰を信じて其繩に取付けば崖の上に引上げらるゝのである、崖の上の人の力は釋尊の本願力であり、繩の力は妙法の本濟力であり、繩に取付く人の力は我等の信念力である、法蓮鈔には

例せは悲母の食ふ物の乳と爲りて赤子を養ふが如し、今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子等云々、教主釋尊は此功德を法華經の文字と爲して一切衆生の口になめさせ給ふ、赤子の水と火と毒と藥とを知らされとも乳を含めば身命をつぐが如し。（遺一一五八）

母とは佛陀である、赤子とは我等衆生である、母の食ふ食物とは佛の因行果德の積功累德の功德を云ふのである、佛は其功德を妙法五字の簡單なる形式に結束して衆生に與へらるゝ、母の食ふ物には種々雜多の物がある、各種の營養分を吸取せんが爲めである、然し夫れが乳汁と成つて分泌する場合には但一種の乳である、其乳の中に凡ての營養素を含有して居る、夫れは母が自身の力で消化吸取した結果であるからである、若も母の體內にて消化せらさるものであるならば、赤子は其營養分を攝取することが出來ない、如來の御悟を通して來た、眞理知慧功德でなければ、我等凡夫は何等の利益をも得ることは出來ないのである、母と乳とを引離しては、赤子を養ふ乳汁の出でさるが如く、佛と妙法とを引離しては、我等衆生は救濟さるゝことは出來ないのである、曾谷抄（遺一五一六）には

法華經は種の如く、佛はうへての如く、衆生は田の如くなり。

とありますが、同し意味含である、以上の御文は何れも、本佛と本法とは離るへからさる關係にあることを說明せられたのでありますが、本佛と妙法との關係は斯樣に密接の關係があつて此が離れて仕舞ふたのでは、何らも働けなくなるのである、佛は妙法蓮華經に依つてゞなければ衆生を救ふと云ふことは出來ない、妙法蓮華經は佛の御手に依つてでなければ其內容が充實しない、双方並んで始めて衆生を救ふの力と爲つて顯はれて來るのである、妙法蓮華經は佛陀の慈悲と我等衆生の信仰とを聯絡するの働を爲すものである、崖の上と下との人の間を聯絡するのは繩である、我等の信仰は其繩を通して崖の上に通じ、崖の上の人の慈悲は繩を通して下に通ずるのである、此繩は上の人も手に握りて始めて役に立つのである。下の人も手に握りて故に妙法は佛陀と我等との仲介者と爲るの働を爲すのである、本化の菩薩は其意味合を我等に敎授すべく直接にお世話を燒いて下さるゝお方である、母と赤子との譬で言へば本化の菩薩は一つも衝突矛盾は無い、此意味に三寶樣を領解することが日蓮主義の信仰である、此意味合を何等の文句も言はないで、一日燎然誰が見ても判明する樣に、文字を以つて示し給ふたのが日蓮聖人開顯の大曼荼羅卽ち本門の本尊である御本尊を拜見して其意味が分らずに彼此間違ふた屁理屈を云ふのは餘程の低能兒である、此も此本尊の實體は常住實在にして常に我等の道を行し道を行ぜさるを照覽在すことを信ぜねばならぬ、要するに日蓮主義の本尊觀に於ては常住實在の三寶を以て本尊とすることと三寶の關係調和せられ、信仰意識に於て何等の矛盾あらざること

を得なならば、本尊に就ての雜多の問題は自ら氷釋し得ることが出來るのであります。

來客曰く、

『デモクラシーは世界の大勢であります。之に順應せねばなりませぬ』

主人曰く

『此方の良風を以て世界の大勢としたいものです』

子供曰く

『坊は世界感冒は引きたくないや』

（はなぶさ生）

機微譚語

山根青村

七六、兼寛の駄々

醫學博士男爵高木兼寛は有名なる交際家に似氣なく、其家に在るや頗る氣六ケ敷人なり、一日兼寛其抱へ車に乘りて某家を訪ひ、其歸るに當りて車夫を呼べども急に來らず、兼寛大いに怒り徒步して歸る車夫追及して頻りに罪を謝すれども聞かざる爲して行く、時に天俄かに曇り大雨將に到らんとす、車夫以爲らく奇貨措くべしと、而して雨脚漸く目前に迫りて早くも點々衣を撲つ、兼寛今は堪らず幾度となく車夫を顧れども、車夫亦見ざる爲して特に徐々として行く既にして驟雨沛然として到る、兼寛終に猫撫聲して車夫の名を呼ぶ是に於て乎車夫始めて車を駐め、徐ろに謂て曰く只今參りました兼寛苦笑して曰く、能く早く來たなと終に乘りて歸る、爾來兼寛甚しく駄々を捏ねず。（隨意雲御書）

不虛の俄雨に危ふく濡鼠の御難を受けなんとし、かくてゆくりなく氣隨我儘の鼻柱を摧かれたる氣味のよさ。由來乳母日傘で寸丈延びた人體ほど、他人困らせの代物はなし、難儀知らずの野生發育、浮世の味は少しも御存知なく、自己の欲するがまゝ横紙破りの無理難題も通るものと、從者末社を手古摺らせ遊ばす、艱難我を玉にするとの古人の言ひ草、げに此輩ちと世路の風波に揉まれ辛苦修養を積みて、せめては人並々の心ざまに立ち戻らまほしき事にこそ。可愛い子には旅をさせろとの古諺さえあり、鞍壺しつかと一鞭二鞭あてべきなり、責め苛なみ窮窟の型にはめ、涙の出るほど血の慘むほど、人生世路難の稽古肝要なり。

聖語、麻の中の蓬、筒の中の蛇、よき人に睦むもの、何となけれども、心の振舞も言も直しくなるなり。

（隨自意御書）

七七、醫者の本領

水戸文公ある時鷹野に出で、城下の馬口勞町と云へる所を過ぎける時、侍醫原南陽に問ふて曰く、此町の富豪は誰々なるや、南陽對へて曰ふ某々なりと、公歸途又其地を過ぎり又南陽に問ふて曰く、此町の極貧者は誰々なりや、南陽知らずと答ふ、公の曰く汝は富豪のみを知りて貧者を知らざるか、南陽大に耻ぢ入りてそれより己來は病家の請求ある毎に、貧富を問はず自ら藥籠を擔ひて速かに之に赴きしと云ふ。後には一代の名醫となりぬ。（逸話文庫）

醫は仁術也。貧富に依りて診察を二三にすべきものかは、然も多くの醫者先生貧者に疎く富者に親しみ、黃白の多寡によりて其態度を二三にす、大切の人命を預かる職に居て、謝禮の厚薄に眼眩む危險云ふべからず、流石は文公卒然の下問に侍醫南陽の職責を詰り心事の陋劣を叱す、南陽穴あらばと地に匿伏す、快言ふべからず、顧みて今の御房達御布施の多寡に誦經を二三にせずや、今の信者達依

法不依人の金言を嚴守せるか。げに世は五濁の惡世なり、醫者病人に接する前に診察料を先どりし、如實の信仰者亦鐘太鼓でお尋ねものなり、さても〳〵。

聖語、法華經を信ずるとも、誠に色心相應の信者能持此經の行者はまれなり。（阿彌陀殿女房御返事）

七八、江戸贔負

太田蜀山は大の江戸贔負なり、ある時加賀屋梅玉（中村歌右衛門）大坂より下りて非常の人氣なりしかば、蜀山甚だ心憎く思ひ居りしに、神ならぬ身の梅玉爭てか之を知らん、一日畫絹へ豐國に極彩色もて上方美人の肖像を畫かせ、蜀山の許へ携へ行きて賛を乞へり、蜀山は暫く之を眺め居たりしが、微笑を含みながら筆執りてサラ〳〵と書き下し梅玉に與へぬ、梅玉押し戴きて之を一讀するに、歌右衛門能く聞けよ、上方ではコンナ美しい女でも、立小便をするぞよ、

とありしとぞ（逸話文庫）

敢て局量小なりと貶するを止めよ、お國自慢は寧ろ慫慂すべきなり、由來鄉を愛せざるものに愛國の念慮厚きためしなし、燃るが如き愛鄉心あるもの熾て熱烈なる愛國家なり、聖日蓮身延退藏の後も、五十餘町の嶮坂難路を殆んど毎日の如く其山巓に登りて、東南遙かに雲煙漂渺の裡あれこそは故鄉安房の一角よ、なつかしき亡き父母の奥都幾の在す方よと誦經唱題にいそしみ給いしとぞ、身延山巓思親閣の靈域今猶ほ嚴存、詣者をして覺へず襟を正さしむ。

聖語、日蓮生を此土に得たり、豈吾國を思はざらんや。（一昨日御書）

高橋岡田兩理學者の立春觀を評す

松尾皷城

前號主説に於て『日蓮主義から觀た新暦の正月』と題し太陰暦（舊暦）西洋暦（太陽暦）を廢して中正暦採用のことを主張してをいたが、國民新聞紙上（二月五日）に高橋東京天文臺員、及び岡田博士の立春に對する説が出て居り、それが聊か自分の説とは都合のわるい所もあるので紹介旁々批評を加えてをく。宗教雜誌に餘り暦の事など連載すれば異に感ぜらるゝ方もあるかも知れぬが、暦は天地の顯れてあつて、宗教は人に必然の道德を敎ゆるものであつたならば、暦の誤りは日々天地必然の道を佯つて居ることになり、信仰敎導の上に不知不識に矛盾疎隔を生ぜしめ、人心迷惑して因果の敎を疑ふに至ることになるのである。殊に方位に約して本門本尊の位置を正さば艮（東北）であり、時に約すれば艮（黎明）たることは宗祖遺書に示されて居らるゝ所、而も地と時との設定は天地歷然の本分より出るところの公けの道であるのを、西洋流の人造的月次配當は即ち方位幷に時の設定を

混亂せしむるから、隨つて我本門本尊の方位（横）時間（縦）の設定を攪亂することになる、右の次第であるから、今の西洋暦を釋尊時代、孔子時代、聖德太子時代、日蓮聖人時代に用ひて居た中正暦（現今工藤氏の測節暦理せられしものは卽ちそれ也）に還元することを説くことは決して無用の事でないのである

さて國民新聞には『けふ立春、昔は重要な季節』と題して（以下高橋氏の説を紹介し批評する）

五日は立春である立春は昔の正月元日である太陰暦では正月が遲れて來たり早かつたりするのである卽ち十二ケ月が一年であるが十三ケ月の事もあるのである昔は月では氣候が分らなかつた本當の氣候を現はすには太陽に依らなければならなかつた立春とか春分とか云ふのは太陽が其位置にあつた時で元日の平均を取つたものだ。

太陽系に位置を占めて居る地球は月の影を標準として暦數を立て氣候は正當に現れる筈はない。

▲賣卜者などは　今でも立春を以つて一年の區限りとしてゐる昔は立春を正月節と稱した『年のうちに春は來にけり一歲は春とや云はん今年とや云はん』と云ふ古歌がある之れは昔立春が年末に來たり年が明けてから來たりした事のあるのを詠じたものだ而して一年十三ケ月ある時は

▲立春は年二度　ある事になつてゐた年の初めと年の末とに二百十日や八十八夜の別霜は立春から數へたものである。

舊暦（太陰暦）を用ひた時は閏月があつて十三月の事があつたのであるから勿論陰暦を用ひて非常な不便や無理な事が起つて居たのである、謂はゞ小を以て大を尅して居たのである、だから陰暦の廢されたことは大に喜んでよいのである。

併し今ではそんな必要はないのである唯だ立春で春の氣候が來た寒が明ると云ふに差支はない。

西洋流の環年測では立春が二月四日とか五日とかには來るといふ事は略間違いがないけれども、正月元日が卽ち寒の明け立春なりといふ劃然たるものに及ばざること遠しである。一を一と云ふ二を二と云ふは名實の伴ふ理實である、然るに名は二つと云ひ實は一つと數へるは徒らに神腦を濫譟に誘ふものである、正月元日より一數を起し春分を起し四月七月十月と四季の順道を數へ名實の契ふことは文明的であり、科學的である、二月五日が立春（正月元日）と思へば差支はないと云へば云へても別に事實一月一日を元日として儀式をし春と稱するものなりとせば、矢張り差支は生じて居るのである。

されば昔としては極重要な季節であつた立春は

▲冬至と春分　の眞中で春の初めである立春後を餘寒と云ふのは春が來ても冬の寒さが未だ殘つてゐるからで詰り行火を入れても急に暖かにはならないのと同じ事である一箇日の低かつた冬至に比すると今の立春時は餘程日も高くなつてゐる一日を一年に例へれば夜中が冬である。

この説明の通りである、たゞ『昔としては極重要な季節』とあれど、昔でも今でも變ることなく之を重要な季節とせねばならぬ。

▲世界の明る　さも非常に違つて來た丁度朝のやうに。

此の意味は少し解らぬ、どう云ふ意味か、人文の發達したことを此に引き出したのでもあるまい。

昔は二十四節と稱してそれ〳〵重要視されてゐた其中で彼岸等の八節が稍重とされてゐたが就中立春は尤も重要な季節で農夫が種蒔をするのでもなんでも立春を基礎とした。

この通りである。農夫が季節と月日とを別に考へねばならぬやうでもスグ面倒を起すではないか、一年季節の標準が立春に起り月日は季節と卽合して圓環するに至ることを希望するのは至當の事ではないか。

西洋では立春が冬の眞中彼岸中日をスプリングの初めとしてゐる現今の月日は大略氣候を現してゐるから何も立春を當にしなくても好いのである。

西洋暦（太陽暦）は圓環年の日時分秒測割

は中正暦と同じてあるから假ば二月五日とか四日とかには立春は來る、二重の考をつかつて行けば大略氣候は同樣に毎年現れて來る、しかし立春を正式に立てゝ元旦とし標準として行くに越したことはないのである。少しも、不完全のものは完全に進めしめぬばならぬのは人類の文明に活きる所以である。

太陽暦は太陰暦に比して變動が少ない、中正暦は絶對不變の者である、太陽暦の立春は本年は二月五日で中正暦は六日に當り一日の相違がある、中正暦の立春は變動がないが太陽暦は四日になることもある。中正暦では日曜等の如きも一定して動かない。又太陽暦の二月が二十八日と云ふやうな端數の作り方は確に其暦の缺點を自明して居る。

太陽暦の一月一日は何の標準でをいたのか一寸めやすが立ぬ要するに日本の西洋の心醉者が一も二もなく陽暦を用ひたのだから之は東洋太古の眞暦に戻し、西洋にも之を用ひしめたらよいのである。

次は中央氣象臺の岡田博士の同日の國民新聞紙上の說を評すれば（以下岡田博士の談）

五日午前五時四十分立春入節と暦にあるが之の立春といふ文字には何の意味もないことでまあ古來の傳說だと思へばいゝ。

之は岡田博士の無責任の放言である。元來學者が少しも東洋の學を研究せず、偏に西洋の學にのみ明かならんとして遂に我の理をも沒却しまふのである。岡田博士の蒙は高橋氏が其の一分は啓いて居ると云つてもよい、前號に述べた自分の一文も亦一の立春論と云つてもよいのであるから參考になる。

元來日本のやうな寒溫熱の三帶に亘る國の氣候を一つの暦に依つて計測しようといふのが既に困難と言はなければならない余としてはこの區別法の文字を一二三に更めてもらひたい位である。

三帶の氣候を一暦で計測することの出來ぬのは云ふ迄もないが、しかし標準は何れに採るべきであるかゞ問題である。人類棲息の最も安穩地帶は中間の溫帶であつたならば溫帶を標準とし、他は之より計測することは中正の道と云ふべきである。

檄して參聽を勸む

廣部永眞

左は千葉本圓寺廣部永眞師の說法參聽勸誘文なるも意氣壯なるものあり依つて之を掲ぐることゝせり

今を去る六百年前奮然蹶起正法宣傳に死身弘教し、北條天下を諫むる逆臣國賊を以てし、諸宗諸難は爐石の鐵金と輕視し、幾度か死地に就くも君子は中天せずと信念し、法憧高く教藪隆々として破邪顯正に努め、本佛の救濟力を示現して、向ふ處同化の實を擧げ、最終の善美を身延の山頭に收め給へる、日蓮大聖の壹期は『廣宣流布』の法華經に叶へる一大眞教を布施せられたり。然るに幕權は德川に波及し幕威の自衛より加ふる迫害は、將に法脈をも斷たんとす、爲に朋徒は正流を棄して權威に媚ひ、世に阿りて邪義を附會す、我宗、開祖日什大聖師は深く之を慨し、六十七の老軀を以て東說四論し、常樂院日經師は耳鼻剝削の刑を受けて『配所』北越に弘教し、日啓上人は家光公の面前に法論勝利して、品川灣頭に妙旗を飜す等の死身布教の傑師に依り、日蓮大聖の正流は、我が顯本法華の神髓に宿りて時運の開展を待つこと彌々久し、恰もよし幕雲破れて　天業復古の　聖澤に浴するや、日蓮主義の研鑽は勃然として興隆し、日と共に信順者の多きを加ふるに至れり、此の慶時に際せる我が宗の僧俗は貴賤老若を擇ばず、進んで信仰し奮つて活躍せらるべし、是れ宿昔の大願にして、顯本宗徒の本分なり矣

且つ夫れ宗外家に在つても、日蓮大聖は總州の先覺者たり、宜しく宗旨の異流に執せず之れか研究に努めらるべし、蓋し鄉土の先覺を知らざるは恰も國家の祖神を知らざるの類か、須らく探詮あるべし、玆に時運に鑑み宗格に則り謹而諫言し恭しく參聽を歡迎す、豈に貧僧を輕賤して大法を捨つる勿れ矣

□

大阪　山田秀太郎

此余曩日所贈於田所美治君今以之似皷城松尾研兄併乞政

大概人多變變遷　國君晉識節操堅
議爲文部次官顯　貴族議員任命連

余有所感而特賦此詩以贈于皷城吾人足下請足下之諒焉

皷城松尾吾人足下吾墓
墓君之餘栽此詩
嶄然顯頭角是固出眞理
君之才名顯世丕
學力富贍才有餘
有餘才以博美譽
靈眞克寫山水景
使人恍惚爲望諸

聞說生平寡言語
有時舌鋒議能禦
拔山蓋世呑牛氣
克鎔克收經年所
人也一朝際會風雲
非池中物仰豪舉
嘗公到于宰府之前對楳惜別咏一首歌然處
其梅在於宰府云之事載在書余轉感焉因是
賦之以似皷城松尾研兄併乞正
嘗公威德得無窮
歌使楳神感至誠
慙我多年題目唱
法華何事日傷情

廣告

本山妙滿寺振替口座加入致候間此段廣告候也

大阪　四六二五九番

追て東京四三六九番は財團口座に付財團に限り振込相成度候

京都寺町二條

妙滿寺

課題和歌『曉山』

子爵　清岡長言選

◎天　京都七條猪熊　中野正甫
にはつとりうたふ八聲に夢さめて
みねよりしろき曉の空

◎地　下谷區中根岸町六二　小柳英夫
庭倉はまた夜のゆめや結ぶらん
しらみそめたるあしからの山

◎人　丹後國加佐郡有路上村廣岡圓
あかつきのかねのひゞきもきこゑつゝ
ほのぼのしらむ遠の山の端

◎佳作

◎山まつのこつ枝にかゝるあけぼしのかけまとあかししのゝめの空　下谷小柳律子

◎さしくしのあかつき寒くなかむればまた春めかぬ若草のやま　雜司ケ谷矢野滋子

◎東雲のあけ行くそらの山の端にたかく聞ゆる鶏のこえ　千葉縣醍醐榮司

二行報道

▲僧俗同信會　戰後布教に順應して文書傳道を劃す、五千部以上印刷、本多猊下執筆さるべし

▲日本會計協會は清明會と聯合して第四回例會の講演會を開けり、渡邊鐵藏、志田鉀太郎の大僧正本多日生の三氏講師たり

▲二法學博士講演開始前東家小樂遊の餘興浪花節は洒落たりとして報告を得たる中に備前の原田日勇師、豐橋立正會、京都千葉大阪等あり

▲一月の活動

▲備前和氣學校にて青年會、藤野小學校にて青年團總會、何れも原田師出席さる、新置觀信前演、川口長治宅、婦人會、同信會等あり。

▲片尾校長等「意志の根底を法華經に求めよ」は

▲岡山本行寺に於ける原田日勇師の演題なり

▲婦人會初會には大慈院は銀井乾升師、正行院本正寺は萩原部長の法話なり明德學園も同師

能仁事一師は『國民の四大自覺』の題下に獅子吼

▲三教區青年布教團第一回茂原道路布教は山田誠心、長岡育應、竹内顯領、岡本教一の四師

▲京都妙滿寺十二月は國禱會、護正會、壽量品結講に萩原啓門師出演さる、常說教益々盛大

▲本山例會を十八日に開く、三谷會善、石川顯隆、國友日斌の順序にて講演、十二月は終る

▲一月の本山は國禱會一二三の三日、四日各院席檀家年始廻り、護正會新年宴會等例の如し

▲國光婦人會法光院、成就院、寂光寺、久遠寺何も婦人會あり萩原、金光、清水の諸師法話

▲本正寺婦人會と共に宇都宮主計之助太郎の二人にて統一節

▲綾部了圓寺聯合布教には萩原部長、金光孝碩二師出張、統一節は餘興として宇都宮出席す

▲丹波胡麻の勝田藤吉宅に萩原、清水一乘、木村日順の三師出張法話さる京都法將は健而勇盛大執行、二月一日萩原本山部長導師の許に、

▲大阪堂閣寺より飛報あり、十三日新年初講

▲故古谷上人第七回忌法要を修し且つ講演會を開く、京藤義應、古谷幹夫、上田智量師等演

▲津山町能仁一師は三十日間上之町弘通所に於て寒修行を執行し立正安國論の講義を催す

▲千葉縣山本木、長柄山等に賢乘師より報あり、六地藏、皿

▲千代丸、力丸青年會有、河野見中山本師出席支會には長岡育應山本二師、山

▲矢野、和尚鞠井高木より報じ來る、去年は午で飛歩いたが、木年は末で少し大人敷すると

▲從來餘りに折伏的で自他兩界から惡まれた云々外に僧風につき慎慨し來る、馬能可爲馬

◎打むかふ山はかすかにうは玉のやみよりしらむ曉のそら　千葉縣　柳橋八重子

◎鼈には燈火見ゆる家もありて峰より明くるあかつきのそら　東京府　西澤　明花

◎ひんかしの空明そめて山の端を靜かにめくる曉の雲　千葉縣　渡邊　乾航

◎ふもと路はまた明やらてうす靄に繪かくはかりに見ゆる山の端　東京　勝田　宣和

◎鼈路はもやにかくれてあかつきの風よりあくるひんかしの山　同　松尾　清明

○入選

○常にみる雫へしまつの木影さへさたかに見えぬ曉の山　千葉縣　笠見　樂也

○曉に見ゆる山こそうれしけれ長き舟路に憧るゝ身は　大阪　長尾猶之助

○曉に田子の浦よりなかむればうすむらさきの不二の神山　一名古屋　有田　麗陽

○朝もやのうすくこもれる曉の山にきこゆるにはとりの聲　東京　松尾　田鶴

○鶏のねに起き出見れば不二の山今朝むらさきに明そめにけり　名古屋　有田　信子

○谷かけはまた闇なれと頂きはむらさきにほふ不二の芝山　名古屋　有田　健山

○在明の月はいつまでのこるらんあかつきちかききその山道　下谷　小柳威之允

○あか星は東の空にかゝやけと西の山の端月そ殘れる　下総　星野　聖祐

統一團報

●統一閣日曜講演

十二月八日　晴
心に就ての教訓　木村義明
正直と法華經　松尾鼓城
日蓮上人聖訓要義　本多日生
傍聽者　七百有餘名

十二月十五日　晴
活力　高木本順
日蓮主義より觀たる大國民　野口日主
傍聽者　參百名餘

十二月二十二日　雨
諸法實相　高木本順
人と教　秋山乾英
日蓮主義とは何を教ゆる乎　關田日城
閉會の辭　篠田貞二
傍聽者　百有餘名

▲關員津川明信氏は求道の熱心家にて統一閣教壇に師依し深かく各講師の講演を勞とし歲暮として金拾五圓を各講師に贈らる。

（幹事　篠田貞二報）

●大正八年統一閣日曜講演

一月十二日　曇
立正安國　高木本順
羊歲の所感　松尾鼓城
戰勝の新年　井村日成
傍聽者　五百有餘名

一月十九日　晴
日蓮主義社會觀　高木本順
信行要義　篠川日堂
日蓮上人聖訓要義　本多日生
傍聽者　六百有餘名

一月二十六日　晴
生と死　秋山乾英
報恩の生活　上田智量
日蓮上人聖訓要義　本多日生
傍聽者　七百有餘名

●國禱會（統一閣）

本多總裁猊下には萬國來熱海（特信者諸岡氏別莊）に於て御靜養其の他種々の事情に依り當閣國禱會定日一月六日を同月二十日に延期せり。さて當日は大國旗を門柱に建て紅白の幕を張り閣内は中央電燈の上に眞綿にて日と蓮を現はし（加藤寅五郎氏寄附）之れを中心に六根色の絲紐を蜘蛛手に張り梅花（紅白造花）數百を飛れ閣顧統一と記したる短冊を付し閣内は紅白の幕を張り電燈と相映して壯觀を極む定刻本多總裁猊下導師の下に國禱會を嚴修　今上天皇陛下の萬々歲を禱り奉り引續講師謝恩の辭を宮原六郎氏述べ新年宴會に移る總裁猊下には一場の訓辭を賜ひ本年の覺悟を喚起せられ宴酣なる頃來賓の卓上演說數雷あり高橋陸軍中將閣下の發聲にて萬歲を三唱來賓之れに和し堂を動かんばかりの拍手起り無寞事散會せり來賓百四十八名を算す。

因みに散會後幹事席の卓上に何某として幹事宛の封書あり封を開けば手も切れんばかりの五十錢紙幣六十枚（參拾圓）講師謝恩の爲めとし別に金拾圓「統一」へ寄進としあり感る特志の淨財を投ぜらるゝ何某こそ何人なりやと幹事側にて種々詮議せしも容易に判定し得られず結局日本橋區室町の早川太吉氏ならんと推定せり尚金貳圓何某として亦金壹圓横山氏より布教費金へ寄附せらる記して芳志を謝す。

（幹事　篠田貞二報）

○ふく風にうきよの雲を拂はせてあかつきかたの不二やおろかむ　大阪府　竹内　軌榮

○つねにみしむかひの山もあり明の月に榮えある曉のそら　千葉縣　小川　藏司

○霞たつ末の松山よこ雲のしらみ初けりあかつきの空　千葉縣　春日よし子

○おきいでゝ山の端見ればよこ雲のしらみ初たる曉のそら　千葉縣　林　ゑし子

○雲間よりしらむ光りは見えながらなほ山晴き曉の頃　千葉縣　萬新舍一止

○くたかけの聲もきこえて旅枕ほの〳〵あくる小夜の中山　千葉縣　福島　正之

○曉の夢またさめぬ東山すかたかすかに見えそめにけり　三重縣　辻本紅葉子

○きゝすなくこえもきこえて曉の吉野の山は靜けかりけり　愛　戸　堀江得一郎

○濃衣の霞の袖につゝめともはれて長閑けき曉の山　福岡　熊澤　優子

○あさまだき晴れたる雲の大空にいよ〳〵高し富士の嶺山　靜岡縣　佐原　弘風

○遠近の鶏のこえ聞えつゝ朝日いつらんひんかしの山　高岡市　古谷　雲峰

○玉くしけあかつきつくるかねの音にほの〳〵みゆるひんかしの山　札幌　法谷キヨ子

○有明の月ものこりて天つそらねさめしつけき愛鷹の山　、巢鴨　天津　設

○有明のかけもうすれて筑波山むらさきふかき朝かすみかな　巢鴨　白菊

●豐橋正立會

一月十九日午後六時開會當日の來會者は吉橋少將及び新入會員千葉砲兵聯隊長始め知名の士十八名にして諸井文學士は「捨閉閉拋は日蓮主義の大敵なり」と題し思想家としての上人の根本的破壊と根本的建設とを詳論し次で吉橋少將は「國民思想統一の目標」と題し我が國の現狀より延て對外關係に及び思想統一の目標は眞正なる國防的思想にあると結論し右終て新年宴會に移り會員の所感等あり歡興を盡し十時三十分閉會因に本會は一月より會費金貳拾錢徴集の事に決し會計として服部平之助横田常次郎兩氏當選せりと。

梶木日種師の本葬

前號に其遷化を傳へたる感應院日種師の本葬は一月二十五日品川妙國寺に於て營まれたり。本尊の寶前には師が助業に成りし大藏經要義其他の出版物を飾り、大導師には本多師能猊下、副導師には野口權大僧正山根僧正、參列の諸師には鈴木、關田、中村、森川、小西の諸師、地方より參集の諸師には千葉縣より、飛山日甫螢亮雄大阪より、上田智量、京都より金光學碩、豐橋より松本堅晴、神奈川三澤組合學林よりは星野純義の諸師にして、居士側にては高橋、佐藤、宮岡の三中將矢野檢事、松本少將、市原大佐、岩野大監、吉田辯護士等參列、嚴肅なる法要を營まる、弔辭は地明會久富久子、正法護持會の山田、顯本學生總代、統一圖幹事寵田等の各代表者、長谷川日濟、竹内無著諸師之を讀まる、弔電は不受不施花房日秀、大阪天晴會、萩原、井口、坪永、能仁師等數十本にて頗る儀盛を極めたり、因に宗務廳よりは左の如く贈階されたり。

僧都　故　梶　木　日　種

大藏經要義の編纂に參與し卒勵努力遂に身を以て之に殉せり仍而其效を賞し權僧正に叙す。

大正八年一月十三日

顯本法華宗管長　本　多　日　生

追悼の辭

人生死別の悲みは今更言ふを俟たず特に有爲の師の遷化に遭ふが如き一層の痛憎を覺ふ故權僧正梶木日種師は大藏經要義の選述に關し第一の助手として專心此事に從ひ前後二年有三ヶ月の間に選述せし經卷は已に四百四十七部の經に亘り其の卷數は實に一千五百六十有一卷を算す而して既刊の大藏經要義は一代五時の經々の中に華嚴、阿含、寶積、大集、涅槃の諸部を了し餘す所は般若と法華と方等の殘部のみ豫定十有八卷の中已に十有一卷を完了したり其功勞眞に多大なりと謂つべし師の翻譯校正に從事するや最も緻密正確を期し一字一畫をも忽にせず爲めに心力を勞せしこと常人想像の外にあり此の大部の印刷に就て殆ど脱植誤字の無かりしは一に師が心血を注ぎたる結果にして我等大藏經要義を講讀する者の師の勞に負ふ所大なるを思ひ又之に由つて將來佛教の興隆に資し幾多の衆生の之に依て救はるゝもの必ず多かるべきを信じ玆に講妙會員等を代表して謹で追悼の意を表す

時　大正八年一月二十五日

海軍中將　佐藤鐵太郎

本葬式場光景

○ほの〳〵とあかつき近き山の端はけにたくひなきこゝちこそすれ　大阪　池田　貞順

○紫に明けゆくをちの山々は狹霧めくりて峯のみ高し　巢鴨　園田　鐵蕉

○ぬは玉のくらまの山もほの〳〵と色つき初めぬあかつきの空　新潟縣　藤田　鶯園

○ありあけの月はのこりてほの〳〵と明渡りたる曉の山　千葉縣　並木うめ子

○曉の雷はれそめて白々と遠こち山の響ぞ見えける　東金　東　貞生

○あかつきの小窓ををせばうら山の唐傘松の見へそめにけり　小石川　松尾　周子

◎追加　選者

むらからす梢はなるゝこゑはして
ほの〳〵しらむひんかしの山

次號課題『雨後若草』（月末〆切）

課題『氷解』

◎一瀉の堅氷解けて出舟かな　午込　丁圓生

▲評　浦鹽あたりの景ならん喜悅の感情浮き且つ雄大の響きあり

矢野直子孃逝去

本宗大貝那矢野茂檢事の末女直子孃は麗はしき信仰の下に女子の勉むべき學業修養中昨春より病臥されありしが藥石效なく去る七日遂に逝去さる、十日午前十時統一閣に於て本多猊下大導師、野口井村二師副導師として嚴厳なる法要あり、又矢野施主の希望に依り簡單なる法話あり左の野口師の歎德文ありたるが參列者は姉崎博士、宮岡佐藤中將等在京當代の同主義者の殆ど全部にして儀盛を極めたり。

弔句　長の隅に蕭あり蓍蒼　松尾生

諷誦歎德文

南無本門壽量の本尊別由來法大導師日蓮大聖人日什大正師等來臨影響真慈納受玆に正四位勳二等矢野茂氏愛女直子孃十九歳を今生の一期として長逝し畢ぬ其法讃を不染院妙華日香童女と云ふ孃は明治廿四年七月二十四日長崎に生る貴性穎悟親に孝朋友に信、好學嗜文現に女子大學高等女學部三年在學中たり昨年十一月病の床に臥してより已來醫藥遂に不奏其効大正八年二月七日午前二時芳顏如眠臨終正念し玉ふ鳴呼人生無常なる哉南枝北枝の梅花咲事に東岸西岸の柳織業別なく蕭蕭欲秀如雨催之の感に堪へざるなり然れども父母深重の信仰と願也生前の奉佛の功德に盛へ四菩薩唱導の扇と共に天華撒紛の内諸天聖衆に擁せられ遂に靈山淨土本佛釋尊の膝下に詣らん然らば則寂光會上常樂我淨の月朗かに靈山圓中開佛知見の花美し倘每自作是念の本誓有願諷誦歎德文依而如件

大正八年二月十日

統一圖葬儀席上

事智感院　日　主

斷草錄

野口海印

■人は精神的光明裡に照されて行住坐臥の滿足を足るに於て眞實の目的は認められたのである。光明裡に照されるのは即ち信仰の力に外ならない。

■信仰問題は理論でない實際である、心の發動である。

■從淺至深は信仰向上の重大要件である。更に高く更に深きを望むは人生天約の向上的勢力であるからである。

■現實を離れて未來を渴望するは憫むべきである、現當二世の間には一如の繫が嚴として存じて居る、我此土安穩は此消息でがなあらう。

■金を護るが爲に信仰を營み、之をまた奬勵しつゝある宗教家は憐むべしである、心の苦痛は金の爲に一掃し能はざるが故に。

、氷解けて波に漂れる生洲かな　同

、草庵に霜解け頃の茶讃かな　高岡　古谷震峰

○北國の大氷柱想に解け初めぬ　同

、まばゆき日南や池の氷解けぬ　同

○氷解窓一杯の船通る　長門　萩村

▲評　其家の位置想像に餘りあり

、寸に落たぬ岸顏を出す氷解　同

○形なりに拔いた氷の捨てあり　東京　かね女

◎綠側の解し氷や爺怒る　同

○氷解けて足蹴干す竹の船まりぬ　青霧　惟泡

▲評　外出を想像したる後に窓外の生竹を利用せるを見る

○解け殘る氷の池に片寄りぬ　同

○解け初めし氷碎くや船の路　同

、山鳩の拔羽流れて解氷　大阪　山中慶山

○氷解けて水底に金魚生き居たり　三河島　西澤明花

○子供等の掌にいさゝか解けし氷柱哉　同

、氷解で村々にめぐる水車哉　同

、綿縮緬干てあるなり氷解　名古屋　有田麗陽

、子供等かをもちや遊びや解氷　同

○樋の氷溶けて音あり作り湯布　石狩　京極烏兎子

○小氣味よく氷山とけて流れたり　同

、捨て舟の腹から解けて薄氷　成東　堀江狸溪

○氷とけて陽影逆ふ池の鴨むるゝ　同

◎鴨乘りて流れ行なり解氷　營口　蓬子

、解け初めし氷捨てけり手水鉢　同

氷解煤煙ゆらく旅願かな　淺草　青村

▲御手洗やポツコリ浮いて氷溶く　王山

縄貫して枝に懸けり溶氷　同

◎課題『初午』

、初午に女房をやりて留主居哉　明花

、遥遠の嘉友交となり居き一の午　同

○初午や太鼓の湧に泣子あり　麗陽

○臨み合ふ鎭守の鳩や一の午　狸溪

人心統一建議案理由書を讀む

記者

臨時教育會議に於て決議したる所謂『人心統一建議案理由書』を讀んだ。理由説明共に大體に於て同意を表するものであるが、理由中建國以來扶植培養せる本邦固有の文化を基址とし云々といひながら決議中千數百年間國體の尊重に對つて扶植培養の滋力として多大の效顯たる儒佛二道の推奬を脱したるは點睛の失と云ふべきである。儒佛初めて我國に來入したる當時の思想界は實に偏嫁混迷の狀態に陷つたのであつたが、時に聖德王のましまして十七の妙文字を選み、之を冠し之を基本として各十七條の五憲法を選み給ふたのである、所謂通樑、政家、儒士神職、釋氏是れである。則ち三法鼎立して相扶助し、劣點を捨て勝出を採り、爲に國體の精髓益々顯出し、三法即ち固有の本教として認めらるゝに至つたのである、伊勢國智月尼は『三道論』を提唱して冒頭論じて曰く『抑此國に神儒佛の三道駢び行はるゝ往昔より久し、廣く他の美を容れて忌み猜むことなき豁然たる大量の國風ゆへ日の本を異國より君子の國と稱せしこと有りとかや、いづれの道も各自の廣き益ある故世々の帝王よりも立て置き給ふ所なれば』云々と、智月尼は一個微々たる女流俳諧の好者に過ぎぬが而も尚此論ある以て我國風の依つて來るところを知らねばならぬ。『蘭枯るれば芝泣く』とは遺文の例證であるが、神隨が靈芝であつたなら爰ぞ蘭たる佛儒の良道を忘れられる筈はない。推古憲法本紀に曰く『正政の本は學問にあり學問の本は儒釋神なり、この三法は天極の自有にして人道の私則にあらず、皇道を導き國家を治め人情を正うし黎民を善くする實物なり』千數百年前既に三法一基の國風を認めて居たのである。然るに一方に偏執したる固陋派は此の中正の理をも排して強いて孤立に立ち、純を街ふて却つて貧弱に墮り、會々輕跳過激の新潮に遭遇しては固陋貧弱の質に滿足せざる者等は怎ち之に盲從して國家を忘るゝに至るのである、輕跳盲從者の浮薄嗤ふべしと雖も又固陋頑迷の一輩の罪も亦重しと云ふべきである。憲法本紀に又曰く、『其一に通ずる者は知らざるの故に其他を非として有に非ざるもの其れ妄物なりと謂て互に誹謗し交ひに嫉妬す、學還つて邪となり法還つて妄となる是れ聖を破り政を破る之の大罪なり（乃至）凡情頑己を以て己れに甘を是とし甘からざるを非として其偏る者を立て其の嫌ふ者を廢し』云々斯の如き偏固派にして人心統一の基本を示さんとするも得べき筈はない、要するに頑日一部の人士中世界の大勢に順應を云々する者等は輕跳者流である而して之に對抗するに頑固一點を主張するは固陋派である、この兩者の間に立ちて、中正なる健全主張を樹立し開顯滋説以て萬年不動の正義公道を示して日本天保の國體を擁護するものは實に我主義者の任ぜねばならぬところであると思ふ。今統一案を讀むに未だ包容的大量に立ちて徹底の眼目を忘れたるの一瑕瑾なきにあらず冀くば頑固を去り輕薄に流れず中庸正道の公道を守らん。（鼓城）

○初午や鷺飛んで擬の實晴るゝ　同
○初午や泣虫兒も今は博士にて　酒々井　金杉秋月
○初午や紙三尺の幟あり　同
○初午や背なの兒供は踊り居る　同
▲評　秋月君の句相變らず實感を基礎とする一見平凡の如く而も興味の曳くものを有す
、初午の太鼓の音や春寒み　巢鴨　鐵蕉
、初午や豆腐賣子の忙しさ　同　慶山
◎初午や庭の小橋の渡り切め
▲評　手を採りたるは母乎、嫂々乎、父乎、爺乎
、母と子と丈競べする一の午　惟泡
○初午の雛のぞくや鬼瓦　かね女
▲評　鬼瓦に心あるが如し
○初午や日に暈ありて旗赤き　萩村
○暴晴れて初午の太鼓響きけり　丁圓
、初午や谷七郷の旗の數　同
、初午や殿の中に赤幟　蓮子
◎初午や裏門明けし公卿屋敷　同
▲評　明けしも面白いが、開けしであつても亦面白いと思ふ
、初午や狐が馬に乘れる額　同
初午や背の子オウ〳〵と延び上り　青村
▲初午や一列うねる神幟　王山

○營口俳句會一月課題詠草

年賀狀譯の分らぬ俳句哉　蓮子
年賀受平身低頭の畫像哉
親子孫各自署したる賀狀哉
醉ふて寢てけふも年賀に出ざりけり
寒梅や雪のしみ込む庭草履
門に入れば寒梅匂ふ夕哉
寒梅の影踏て行く廊下哉
寒梅や軒に來踏む寺男
寒梅や立年ら飲む甌の酒

○雪積みし夜電燈の消えて燭灯して筆運ひつゝ
ありしが之も消えければ　王山堂
○灯の消えて眼開のかこつ夜寒哉
○灯の消えし時夜の三時なりき妻起き來りて小皿に油をつぎ燈心を入れて燈を點ぜしをいと珍らしく感ぜしかば
雪の夜に燈心太き障子哉　同

○三月號課題『草餅』『柳』

●白如に就て

神戸に於ける「白如」の發行に就て投稿充分ならず、故に發行の運に至らず冀くば句友諸君十二號の廣告を一覽の上續々投稿せられんことを祈る。

○志貴野の發行

統一投句の一人たる高岡市定塚町四丁目古谷露峰氏は今回俳句雜志貴野を發行さるゝ由

一金三圓　東京　窪田貞二殿
一金五圓　大阪　友廣胃腸病院殿
一金三圓　東京　野島連平殿
一金三圓　大阪　相馬小馬三殿
一金十圓　在來　開爲太郎殿
一金三圓八十錢　東京　中澤平五郎殿
一金二圓　播磨　森下馨殿
一金五圓　大阪　上田智量殿
一金十圓　無名氏殿

右『統一』雜誌へ御寄附下されし正に領收候也

淺草區清島町
統一閣
毎日曜午後一時より講演
主任講師　本多日生師
毎月一日午後一時より
自慶會
自慶會には面白き餘興數番あり

本誌改正定價並に廣告代價

○一冊十錢、郵送分は別に五厘申受候
○前金送金分に限り郵送料申受ず候
○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます（但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候）
○故に郵便送り當方より集金のものは半ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金は壹圓廿錢にて宜しく候
○送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの郵便局にて御拂込み下され度、確實に御座候小爲替は紛失のおそれが有ます）
○領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纏め掲載します
○廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五十錢。三分一頁六圓。一行二拾五錢
▲五號活字十八字詰
○交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報を乞ふ、早速御送本可仕候
●當方より集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下され度、何かの御都合にて御拒絶の方も有之候節は其御傳書にて一寸其旨御引續き御送本申上候。又御一報下されれば左樣上候へば、一緒に御放任なく葉書にて一寸其旨御送本申上候。
●多數の事に付て御返事は往復はがきの以外は御返事仕ら
●諸君の場合可有之候
●熱心御畫力に依り我統一が宗教雜誌界中に於て最大の發行中に數へらるゝに至りしことを感謝し申候

日蓮各宗　寺院　御僧

法衣　草木　直に御聯想下され候儀に候
京都　三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●

佛像佛具　位牌木鉦　調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
御用達
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番

舊名『乾清』事大佛師
多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

王山畫會

見本御入用の方には御一報次第進呈致候

東京小石川白山前町一七
統一編輯所方
王山畫會

布田 **眼藥** 效能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓、

布田 **血の藥** 定價壹袋、拾錢、貳拾錢
效能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、
千葉縣山武郡源村上布田參百番地
藥王寺
布眼藥
田血の藥
本舗　齋藤日章
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

牛込區喜久井町十四番地
理髮業
榮軒

日蓮宗法衣專門
寶雲帽　希敎服　袴
定價表ハ御申越次第何時にても御送申上候
飯田法衣店
京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七

佛像佛具　位牌木鉦　大販賣所
宮殿憧幡天蓋其他一式
●各大御本山御用達
御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層勉强仕り莊嚴品一式陳列仕置候

郵稅四錢
定價表ハ御一報次第送呈可仕候
小賣部　京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳〇七壹
大阪四貳五九
卸部　京都市三條通小橋西入
本舗　三法堂　藤田總治

生花教授（生花、投入、瓶花、盛花）
毎月土曜日午後正一時より統一閣に於て生花を教授して居ます、規則入用の方は、小石川白山前一七統一編輯所へ御申込みなさい。

日本橋區坂本公園
加賀料理　**加能亭**

交換廣告及義務廣告御斷り

●念珠ならば小野嘉助店へ●
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
御念珠　各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商
小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿三年　「統一」　參月號

統一

（第二百八十九號）

時事短評……一記者
健全思想と日蓮主義（續）……大僧正　本多日生
一王一佛主義の顯現……權大僧正　野口日主
日蓮聖人教義綱要（續）……僧正　井村日成
機微譚語……山根靑村
千葉縣の宗風を奈何……大橋日襲
日本國體と民本主義……文學博士　三上參次
誤れる佛教國……馬和尙　矢野聖顯
二行報道……一記者
和歌課題『雨後若草』……子爵　清岡長言選
統一俳欄……各地報道

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

大僧正　本多日生師撰述

賜覽天

大藏經要義

文學博士　井上哲次郎先生叙
海軍中將　佐藤鐵太郎閣下序
文學博士　姉崎正治先生論文

全部十八卷
菊版洋裝上製
三方金縁函入
毎冊四百頁以上
改正定價各冊
金貳圓四拾錢
送料各十二錢
既刊　自一卷至十卷

東京本町　博文館

第十卷新刊

本書は大藏經中重要なる經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歷史的思想の傳統を諦觀するの必要に迫れるの時この大著に接す。心ある國人は擧つて本書の出現を歡迎すべきなり。（大正六年）

既刊目次……昨年七、八月本誌廣告に掲ぐ

■日蓮主義綱要　本多大僧正著　正價壹圓六拾錢　送料八錢
■日蓮聖人正傳　本多大僧正著　定價壹圓六拾錢　送料八錢
■高山樗牛と日蓮上人　姉崎文學博士編　正價壹圓五拾錢　送料八錢
■淫祠と邪神　和田文學士著　正價壹圓　送料八錢

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）
▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市浅草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（十錢郵稅五厘）▼